中学校「美術科」における学習評価

平成２９年告示の美術科の中学校学習指導要領では、その改訂において、教科の目標では、育成を目指す資質・能力を一層明確にし、生徒の発達の段階や特性等を踏まえつつ、⑴「知識及び技能」、⑵「思考力、判断力、表現力等」、⑶「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で整理している。また、内容についても目標に対応して、資質・能力を相互に関連させながら育成できるよう整理している。具体的には、「知識」は、〔共通事項〕、「技能」は、「A表現」⑵の指導事項に位置付けられている。「思考力、判断力、表現力等」は、「A表現」⑴及び「B鑑賞」⑴の指導事項に位置付けられている。「学びに向かう力、人間性等」は、「A表現」、「B鑑賞」及び〔共通事項〕を指導する中で、一体的、総合的に育てていくものとして整理している。

このように平成２９年告示の美術科の中学校学習指導要領では、育成すべき資質・能力と学習内容との関係を整理し、一層明確に示していることから、従前のように「評価規準に盛り込むべき事項」及び「評価規準の設定例」の関係のように細分化せずに「内容のまとまりごとの評価規準」だけを示すこととした。事例においても「題材の評価規準」と「学習活動に即した評価規準」の両面から題材の評価規準を設定するのではなく、題材のまとまりごとに、それぞれの実現状況が把握できる段階で評価を行うこととし、「内容のまとまりごとの評価規準」を基に設定した「題材の評価規準」によって評価を行うことにしている。

そこで、まず題材の目標の設定について例を基に説明し、次に題材の評価規準の作成のポイントを示す。

ここでは、以下の題材を例として、その評価例を示す。

第１学年「感じ取ったことや考えたことを基にした表現」
「花の命を感じて」

① 題材の目標を作成する

学習指導要領の目標や内容、学習指導要領解説、生徒の実態、前題材までの学習状況等を踏まえて、題材の目標を作成し設定する。

＜関連する学習指導要領の内容＞

○「A表現」（1）表現の活動を通して、次のとおり発想や構想に関する資質・能力を育成する。

ア　感じ取ったことや考えたことなどを基に、絵や彫刻などに表現する活動を通して、発想や構想に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

（ア）対象や事象を見つめ感じ取った形や色彩の特徴や美しさ、想像したことなどを基に主題を生み出し、全体と部分との関係などを考え、創造的な構成を工夫し、心豊かに表現する構想を練ること。

○「A表現」（2）表現の活動を通して、次のとおり技能に関する資質・能力を育成する。

ア　発想や構想をしたことなどを基に、表現する活動を通して、技能に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

（ア）材料や用具の生かし方などを身に付け、意図に応じて工夫して表すこと。

○「B鑑賞」（1）鑑賞の活動を通して、次のとおり鑑賞に関する資質・能力を育成する。

ア　美術作品などの見方や感じ方を広げる活動を通して、鑑賞に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

（ア）造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の心情や表現の意図と工夫などについて考えるなどして、見方や感じ方を広げること。

○〔共通事項〕（1）「A表現」及び「B鑑賞」の指導を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア　形や色彩、材料、光などの性質や、それらが感情にもたらす効果などを理解すること。

イ　造形的な特徴などを基に、全体のイメージや作風などで捉えることを理解すること。

(1)　知識及び技能に関する題材の目標
・形や色彩などが感情にもたらす効果や、造形的な特徴などを基に、美しさや生命感などを全体のイメージで捉えることを理解する。（〔共通事項〕）
・水彩絵の具の生かし方などを身に付け、意図に応じて工夫して表す。（「A表現」(2)）
(2)　思考力、判断力、表現力等に関する題材の目標
・花を見つめ感じ取ったことや形や色彩の特徴や美しさ、生命感などを基に主題を生み出し、画面全体と花や葉との関係などを考え、創造的な構成を工夫し、心豊かに表現する構想を練る。（「A表現」(1)）
・造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の心情や表現の意図と工夫などについて考えるなどして、見方や感じ方を広げる。（「B鑑賞」(1)）
(3)　学びに向かう力、人間性等に関する題材の目標
・美術の創造活動の喜びを味わい、楽しく花の美しさや生命感などを基に表現したり鑑賞したりする学習活動に取り組もうとする。

② 題材の評価規準を作成する

題材の評価規準は、実施する学習の内容のまとまり（「感じ取ったことや考えたことなどを基にした表現 『A表現』(1)ア(2)、〔共通事項〕」、「目的や機能などを考えた表現 『A表現』(1)イ(2)、〔共通事項〕」、「作品や美術文化などの鑑賞 『B鑑賞』、〔共通事項〕」）ごとの「内容のまとまりごとの評価規準」を基に題材の内容に合わせて設定することが考えられる。

本事例、「花の命を感じて」における「知識・技能」、「思考・判断・表現」（発想や構想）の題材の評価規準は、該当する「内容のまとまりごとの評価規準（例）」の一部を、題材の内容に合わせて関連する表現に変更したり、複数の「内容のまとまりごとの評価規準（例）」を組み合わせたりして作成している。

＜「知識・技能」の知識に関する題材の評価規準の作成＞

第１学年の「感じ取ったことや考えたことなどを基にした表現」の「内容のまとまりごとの評価規準（例）」に示された「知識・技能」（知識）の評価規準
・形や色彩、材料、光などの性質や、それらが感情にもたらす効果などを理解している。
・造形的な特徴などを基に、全体のイメージや作風などで捉えることを理解している。

↓

「花の命を感じて」における「知識・技能」（知識）の題材の評価規準
・形や色彩などが感情にもたらす効果や、造形的な特徴などを基に、美しさや生命感などを全体のイメージで捉えることを理解している。

＜「思考・判断・表現」の発想や構想に関する題材の評価規準の作成＞

第１学年の「感じ取ったことや考えたことなどを基にした表現」の「内容のまとまりごとの評価規準（例）」に示された「思考・判断・表現」（発想や構想）の評価規準
・対象や事象を見つめ感じ取った形や色彩の特徴や美しさ、想像したことなどを基に主題を生み出し、全体と部分との関係などを考え、創造的な構成を工夫し、心豊かに表現する構想を練っている。

↓

「花の命を感じて」における「思考・判断・表現」（発想や構想）の題材の評価規準
・花を見つめ感じ取ったことや形や色彩の特徴や美しさ、生命感などを基に主題を生み出し、画面全体と花や葉との関係などを考え、創造的な構成を工夫し、心豊かに表現する構想を練っている。

＜「主体的に学習に取り組む態度」の題材の評価規準の作成＞

第１学年の「感じ取ったことや考えたことなどを基にした表現」の「内容のまとまりごとの評価規準（例）」に示された「主体的に学習に取り組む態度」の評価規準

・美術の創造活動の喜びを味わい楽しく感じ取ったことや考えたことなどを基にした表現の学習活動に取り組もうとしている。

↓

「花の命を感じて」における表現の「主体的に学習に取り組む態度」（表現）の題材の評価規準

・美術の創造活動の喜びを味わい楽しく花の美しさや生命感などを基に構想を練ったり、意図に応じて工夫して表したりする学習活動に取り組もうとしている。

このことを踏まえて、本単元の「題材の評価規準」を以下のように設定することができる。

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
知 形や色彩などが感情にもたらす効果や、造形的な特徴などを基に、美しさや生命感などを全体のイメージで捉えることを理解している。 技 水彩絵の具の生かし方などを身に付け、意図に応じて工夫して表している。	発 花を見つめ感じ取ったことや形や色彩の特徴や美しさ、生命感などを基に主題を生み出し、画面全体と花や葉との関係などを考え、創造的な構成を工夫し、心豊かに表現する構想を練っている。 鑑 造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の心情や表現の意図と工夫などについて考えるなどして、見方や感じ方を広げている。	態表 美術の創造活動の喜びを味わい楽しく花の美しさや生命感などを基に構想を練ったり、意図に応じて工夫して表したりする学習活動に取り組もうとしている。 態鑑 美術の創造活動の喜びを味わい楽しく花の美しさや生命感などを基に見方や感じ方を広げる鑑賞の学習活動に取り組もうとしている。

知＝「知識・技能」の知識に関する評価規準、技＝「知識・技能」の技能に関する評価規準、発＝「思考・判断・表現」の発想や構想に関する評価規準、鑑＝「思考・判断・表現」の鑑賞に関する評価規準、態表＝表現の「主体的に学習する態度」に関する評価規準、態鑑＝鑑賞の「主体的に学習に取り組む態度」に関する評価規準を表す。

※それぞれの評価規準は「内容のまとまりごとの評価規準」を、そのまま使用したり、具体的な学習活動を踏まえ言葉を省略や変更したりするなどしている。

③ 指導と評価の計画を作成する

観点別学習状況を記録に残す場面等を精選するためには、題材のまとまりの中で適切に評価を実施できるよう、指導と評価の計画を立てる段階から、計画的に評価の時期や評価方法等を考えておくことが非常に重要であり、以下のとおり参考となるような「指導と評価の計画」を作成した。

なお、日々の授業の中で生徒の学習状況を適宜把握して指導の改善に生かすことは非常に重要であるため、生徒の学習状況を記録に残す場面以外においても、教師が児童の学習状況を確認する必要がある。

時	主たる学習活動	評価の観点	評価方法
1	＜発想や構想＞ ・「花」をテーマにした作品を鑑賞し、作者の意図や表し方などについて意見を述べ合いながら、主題と表現の工夫との関係について考えるとともに、形や色彩などが感情にもたらす効果や全体のイメージで捉	○ 知識	活動の様子

2 3	えることを理解する。 ・それぞれの生徒が鉢植えの植物を選び、その花を選んだ理由を考えてみたり、興味をもった花や葉の形や色彩の特徴などから感じたことや考えたことを言葉で書き表したりしながら、主題を生み出す。 ・生徒が生み出した主題を基に、画面全体と花や葉との関係を考え、創造的な構成を工夫し構想を練る。	◎ 思考・判断・表現（発想や構想） ○◎ 主体的に学習に取り組む態度（表現）	・ ワークシート ・ アイデアスケッチ
4 5 6	＜制作＞ ・形や色彩などが感情にもたらす効果などを考えながら、水彩絵の具で、自己の構想に基づき、筆致を変えたり、絵の具の濃度などを変えたりするなど、様々な表し方を試して水彩絵の具の多様な表し方を身に付ける。 ・自分の意図に応じて、水彩絵の具や筆の使い方などを工夫し表す。また、制作の途中に相互鑑賞を行い、他者の作品を見たり自分の意図を説明したりすることにより、より表したいものを明確にしていくなどしながら作品を完成させる。	○ 技能 ◎ 知識・技能 ○◎ 思考・判断・表現（発想や構想） ○◎ 主体的に学習に取り組む態度（表現）	試作の作品 ・ 活動の様子 ・ 作品 ・ アイデアスケッチ ・ ワークシート
7	＜鑑賞＞ ・お互いの完成した作品をじっくりと鑑賞し、作品から感じたことや考えたことを説明し合う。 ・第一次とは異なる「花」をテーマにした作家の作品を鑑賞し、作品の主題と表現の関係や、意図と工夫などについて自分の活動した体験から、新たな見方や感じ方を広げる。	○ 知識 ○ 思考・判断・表現（鑑賞） ○◎ 主体的に学習に取り組む態度（鑑賞）	発言の様子 ・ ワークシート ・ 活動の様子
終了後	＜授業外＞	◎ 知識・技能 ◎ 思考・判断・表現（発想や構想） ◎ 思考・判断・表現（鑑賞）	完成作品 ・ アイデアスケッチ ・ ワークシート

○…授業の中で評価規準を通して、生徒の学習の実現状況を見取り、生徒の学習の改善や、教師の指導の改善につなげるために用いる「題材の評価規準」を示す。

◎…題材の観点別学習状況の評価の総括に用いる「題材の評価規準」（授業内での評価を再確認するための評価も含む）を示す。

④　実際の指導及び評価

美術の表現活動においては、「知識及び技能」である〔共通事項〕が示す造形的な視点の理解や創造的に表す技能と、「思考力、判断力、表現力等」の発想や構想に関する資質・能力は、制作が進む中で徐々に作品に具体的な形となって現れるものである。そのため、造形的な視点についての理解や創造的に表す技能、発想や構想に関する資質・能力は、机間指導をする中で制作途中の作品から見取ることができるという特色がある。

表現活動の途中で評価を行う際には、次のような考え方に基づいて整理をしている。「題材の評価規準」に示されている実現状況を見取るためには、制作を始めた初期の作品よりも、様々な資質・能力等が働いた跡が見られる完成間近の作品や完成作品から評価をすることが妥当であると考えられる。しかし、最終的に目標を実現するためには、まず主題を生み出し、次にアイデアスケッチ等で知識なども活用しながら構想を練り、最後に材料や用具を生かして作品を制作するといったそれぞれの学習が確実に行われることが大切である。そのため、それぞれの段階で「題材の評価規準」を位置付け、学習のねらいが実現できていない生徒を見取り指導をし、一人一人の生徒が段階を追って確実に学習を進められるようにしている。その際、例えば、アイデアスケッチ段階の発想や構想の評価は、配色等が十分見取れないので、暫定的に「おおむね満足できる」状況（B）等を評価し、完成が近付いた時点で再度評価を行い、最終的に授業外での完成作品で評価を確定するようにしている。

また、「知識・技能」の知識については、前半に「形や色彩などが感情にもたらす効果や、造形的な特徴などを基に全体のイメージなどで捉えること」を理解させ、その後の表現の活動を通して、その知識が単に暗記的な理解ではなく、造形的な視点として実感的な理解をしているかどうかを重視して評価するようにしている。本事例では、「形や色彩などが感情にもたらす効果や、造形的な特徴などを基に全体のイメージなどで捉えること」について実感的な理解をしていれば、そのことは作品にも表れてくると考えられる。そのことから、授業の前半の知の評価は、生徒の学習の実現状況を見取り、生徒の学習の改善や、教師の指導の改善につなげるために用いる。授業の後半で完成が近付いた時点で、作品やアイデアスケッチ、ワークシートなどから、形や色彩などが感情にもたらす効果や、美しさや生命感などの全体のイメージなどを意識して表現しているかどうかを知と技を合わせて一体的に評価している。また、創造的に表す技能が十分に身に付いていないことで完成作品からだけでは知が見取れない生徒については、発想や構想の段階におけるアイデアスケッチなどと併せて見取るようにした。

⑤ 観点ごとに評価を総括する

「題材の評価規準」に照らして、「A」、「B」、「C」の３段階で行った評価結果を基に、題材として観点ごとに「A」、「B」、「C」で評価の総括を行う。ここでは、評価の観点によって、「学習活動に即した評価規準」の評価結果のうち、最も数の多い記号が、観点ごとの学習状況を最もよく表しているという考え方と、複数回評価したうちのどれかに重みを付けるという考え方に立って評価の総括を行った。例えば、ある観点の「題材の評価規準」を三つ設定し、それぞれの評価結果が「A、A、B」なら、「A」と総括する。ただし、「A」、「C」の両方が含まれている場合は、「B、B」と同様の評価結果と見なして総括するのが適当であると考えた。また、評価結果が「A、B」のように「A」の数と「B」の数が同数になることがある。このような場合は、例えば、学習のねらいや時間数等に応じて、特定の「題材の評価規準」に重み付けをすることや、「A」「B」が同数であれば「A」とするなど、あらかじめ総括する方法を決めておくことが大切である。

＜参考資料＞
「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料(小学校、中学校)」（国立教育政策研究所）